
第1地域 RRFC 便り9月号

【アフリカ地域の野生型ポリオ根絶認定について】



(2020/08/26 アフリカ地域のポリオフリーが宣言されました)

ロータリアンの皆様へ

この度、[世界保健機関\(WHO\)アフリカ地域の野生型ポリオウイルス根絶が認定](#)されたことを、喜びとともにご報告申し上げます。

アフリカ地域から野生型ポリオをなくすために、ロータリー会員は計り知れない役割を果たしてきました。懸命な活動により、アフリカだけでなく世界のほぼすべての国において野生型ポリオウイルスを根絶してきたことを、私たちは誇りとすべきです。

この進展は、アフリカ地域の全 [47](#) カ国における数十年間の取り組みの成果です。これには、徒歩、ボート、自転車、バスによる数百万人もの保健ワーカーの移動、紛争地帯や政情不安地域の子どもにワクチンを投与するための画期的戦略、まひ症状の検査や下水でのウイルス検知のための膨大な監視ネットワークも含まれます。

過去 20 年間、アフリカ地域と世界中の無数のロータリー会員が、資金調達、子どもへのワクチン投与、自治体・政府リーダーへの支援呼びかけ、予防接種の重要性に対する認識向上のために一体となって活動し、世界ポリオ根絶推進活動(GPEI)によるポリオ症例への効果的な対応と感染拡大抑止を支援してきました。これは、ロータリー、アフリカ地域、GPEI のパートナー団体にとって、世界全体のポリオ根絶に向けた大きな一歩となるものです。しかし、残る 2 つのポリオ常在国でポリオに打ち克つまでは、活動を継続していかなければなりません。

これまで私たちは、ポリオ根絶活動を通じて多くの課題に直面しつつも、目覚ましい前進を遂げてくることができました。ロータリアンが支援したポリオのインフラ構築は、今後数十年にわたって他の疾病から子どもたちを守り続ける永続的な遺産となります。

今私たちに求められるのは、ポリオ根絶へのコミットメントを新たにすること

とです。この闘いに勝利し、[ポリオプラスに毎年 5,000 万ドルの資金を調達](#)するために、一人ひとりの貢献が必要とされます。

この度の快挙は、世界全体でのポリオ根絶が実現可能であることを示し、新型コロナウイルスの世界的流行の中でも活動と協力、そして寄付を通じて前進できることを物語っています。

(https://cdn2.webdamdb.com/md_oKQ9Dsp1d95.mp4?1597788127)

(ホルガー・クナーク RI 会長とラビンドラン TRF 管理委員長の書簡より)

【たった2滴のワクチンがあの時あれば】



(石毛良治さん:東京後楽ロータリークラブ)

きっかけは突然に

『ロータリーの友』2019年11月号に載っていた「内外よろず案内」の「インドでポリオワクチン投与をしませんか」という記事をふと見つけるまでは、まさか自分がインドに行くとは思ってもみませんでした。それまでロー

タリーの奉仕活動はそれぞれのクラブで決めた方針に沿って行われるものと思っていた私にとって、個人の活動は初めての経験です。問い合わせ先に連絡してみると、幸いにもまだ参加者を募集中で、妻が背中を押してくれたこともあり、思い切ってインド行きを申し込みました。

こうして、2020年1月17日～21日の日程で、チームポリオジャパンの1人としてインドでワクチン投与活動に参加しました。目薬のような容器から子どもたちの口にワクチンを2滴投与した時は、初めての経験というだけでなく、私が失敗したらこの子たちの未来にも関わってくると思い、大変緊張したのを覚えています。言葉は通じませんが、子どもたちの笑顔や、母親の表情からも気持ちが伝わり、私の21年間のロータリーライフの中で最も感動した瞬間でした。なぜ私がポリオに関心を持っているのかというと、兄と弟をポリオで亡くしているからです。1つ違いの兄・誠一は、幼くしてポリオウイルスに感染。母と祖母が看病をしていましたが、次第に体が動かなくなり、ついに意識もなくなり24歳でこの世を去りました。3つ下の弟・和雅も足が不自由でした。当時、父が町工場を経営していて忙しく、兄と弟の2人を世話することは難しい事情がありました。弟は静岡県御殿場のコロニーに預けられていましたが、16歳で亡くなりました。亡くなったという連絡があり、弟を連れて帰る車の中では、父も母も

無言でした。本人も苦しんだだろうし、両親もさぞかしつらかっただろうと思います。そんなことから、私にとって今回のインドへの旅は、兄弟の供養という意味もありました。(ロータリーボイスより転載)

【ラダック成人女性識字プロジェクト】

高木直之(かながわ湘南ロータリークラブ)



ラダックは、ヒマラヤ山脈の西の端に位置するインドの自治州で、住民はチベット仏教の敬虔な信者です。[国際ロータリー第 2780 地区](#)とインドの[ニューデリー・ロータリークラブ](#)が、[グローバル補助金](#)を得て実施したこのプロジェクトによって、2015 年ラダックの州都レーに3つの識字教育センタ

一が開かれ、2017年8月の時点で87名の成人女性が読み書きを身につけました。現地でのプロジェクトは、[Mahabodhi International Meditation Centre](#)（以下、MIMC）という仏教団体が中心となって進めてくれました。ラダックでは女性に対する教育が行き届かなかった時代があり、字が読めない成人女性が数多くいます。彼女たちが字を学ぶ最大の目的は、チベット仏教の経典を読み、経を唱えること。上記の写真は2017年の視察時、我々のために経を唱えてくれている女性達のもので、中央の緑のスカーフを巻いた方は、識字センターができる以前、ただの一度も鉛筆を握ったことがなかったそうです。MIMCのモットーは、「Compassion in Action」日本語にするなら「慈悲を行動に」でしょうか。慈悲を行動で示すことを第一と考えるサンガセナ師は、貧しい子供たちに教育の機会を、身寄りのない老人達に終の棲家を、病の人々に医療を届けるべく、このセンターを作ったのです。読み書きのできない成人女性に識字の光を届けることもまた、彼にとっては当然なすべきことのひとつでした。



(大統領を案内するサンガセナ師)

- お経が読めるようになりました。
- 拇印押捺のかわりに署名ができます。
- 家族の衣服を作ったり、売って利益を上げることもできます。
- 農作物を市場で売るときに、だまされる心配がなくなりました。
- 電話番号が書けます。

(ロータリーボイスより転載)

【GETS 参加の地区エレクトに9/15 財団分科会情報】

各地区ガバナー事務局の皆様にお問い合わせ申し上げます。来たる9月15日に開催される GETS 財団分科会に関するお願いです。下記に参加に関する情報を添付してありますので、貴地区ガバナーエレクトにお渡し戴きますようお願い申し上げます。GETS のリーダーか委員会からのお知らせは直接エレクトに送信されていると思います。財団に関するガイダンスは別のファイルでお送りしています。何卒ガバナーエレクトにお伝え願いますようお願い申し上げます。

【管理委員会からの環境保全と RAC に関する報告】

RI 理事会からの承認を条件とし、2021 年7月1日有効で環境を7つ目の重点分野として追加することに一致で同意し、ロータリー財団の使命を次の通り改訂しました：使命：ロータリー財団の使命は、ロータリアンが、人びとの健康状態を改善し、質の高い教育を提供し、環境保全に取り組み、貧困をなくすことを通じて、世界理解、親善、平和を構築できるよう支援することです。(仮訳)

管理委員会は、ローターアクトクラブがロータリークラブと協力して奉仕プロジェクトを行うことを推奨しています。

・地区補助金：

現在のところ、地区補助金のために、ローターアクトクラブが地区に直接申請することはできません。しかしながら、ロータリークラブを通じて地区補助金の資金を受領することは可能(申請、報告はロータリークラブが行う)

・グローバル補助金：

現在のところ、グローバル補助金のために、ローターアクトクラブが直接申請することはできません。しかしながら、2022 年 7 月 1 日から、ローターアクトクラブがグローバル補助金プロジェクトで援助国側提唱者または

実施国側提唱者になることが認められる予定(ただし、ローターアクトクラブがグローバル補助金で以前にロータリークラブと一緒に活動したことがあることを条件とする)。

【金木犀の花に子規の句を添えて】



毎度の子規の金木犀の句に、金木犀の花を描きました。昔京都時代に下宿をしていた場所の近くに金木犀の木があって、9月下旬から10月の上旬にももの凄く良い匂いに花を咲かせていたのを思い出します。

大学の登下校時は、この家の側を通った記憶があります。もの凄く良い

香りでした。

万葉集に「黄葉(もみぢ)する 時になるらし 月人の 桂の枝の 色付く
を見れば」(読み人知らず)桂の枝は、中国で丹桂と呼んでいたようです。

金木犀には月人の楓とも呼んだ諸説があると聞いたことがあります。又
花の色の白いものは、銀木犀と一般に言われているようです。

さて今回の「木犀や 障子をしめたる 仏の間」一般に庭に咲く金木犀
の匂いが気に掛かり、仏間の障子を閉めたように思われますが、子規が
この句を読んだのは明治33年(亡くなる2年前)の秋の筈です。腰の具
合も悪かったと思われまから、仏壇の花瓶に金木犀を供えた金木犀の
匂いが強いので、仏間の障子を閉めたのではと考えました。

同門の高浜虚子が次のような句を詠んでいます。「木犀の 香にあけた
ての 障子かな」(高浜虚子)これを見ると、今まで閉まっていた障子を
開けるとお香の匂いより金木犀の匂いが漂ってきた。とその場の様子を
感じることでした。

子規が数年患ってきた病と対峙して、仏門に安らぎを感じていたに違い
ありません。仏間での心の趣を何に問い、何を願っていたのでしょうか。

人の世の無情を感じていたのではないのでしょうか。(羽部)